

保健の授業における授業者の意識

Awareness of teachers in the Health Education

田中滉至^{*1}, 山田浩平^{*2}, 古田真司^{*2}

Koji TANAKA^{*1}, Kohei YAMADA^{*2}, Masashi HURUTA

^{*1}愛知教育大学大学院教育学研究科 養護教育専攻

^{*1}Graduate School of Education, Aichi University of Education

^{*2}愛知教育大学 養護教育講座

^{*2}Department of School Health Sciences, Aichi University of Education

Email: koji.tanaka0103@gmail.com

あらまし：子供を取り巻く健康・安全に関する問題の多様化・複雑化を受けて保健の授業を担当する教諭の授業に関する意識を調査した。校種間で比較をしてみると、授業に対する意識や学習者に対する意識、授業の方法などに有意差がみられた。小学校では学級担任制であることが、中学校・高等学校では学習者が受験を意識し始める時期であることが授業者の持つ意識に影響を及ぼしていると考えられる。

キーワード：保健の授業, 学校保健, 授業者の意識, 授業の内的条件

1. はじめに

近年、日本を取り巻く健康・安全に関する課題 - 東日本大震災、疾病構造の変化、健康格差、新興・再興感染症、医療費高騰などは多様化、深刻化の一図を辿っているものと考えられる。

しかし、学校において健康教育を担っている保健学習に関する研究からは望ましいとは言えない報告が相次いでいる。野津らが実施した保健学習における学習者である小学生および中学生、高校生を対象に調査⁽¹⁾では、学習指導要領に示された内容の習得状況は校種が上があれば上がるほどに低率を示した。

過去にも学習者の現状に関する調査が実施されていたが、報告された学習者の現状を J.S.Bloom らによる教育目標の分類体系^{(2)~(4)}で示されている認知的領域、情意的領域、精神運動的領域に分けて考えると、どの項目においても低調さが報告され続けているのが現状である。

授業者も過去に調査が実施されているが、学習者と同様に望ましいとは言えない結果が報告されている。具体的には、保健学習を担当している者の保健学習に対するイメージは肯定的なイメージより否定的なイメージが多いという報告⁽⁵⁾や、小学校教諭で保健科教育法を履修した者が 11.8%であることや、2001 年度に保健学習に関する文章化された年間指導計画を立てていた者が中学年の担任で 59.2%、高学年の担任で 75.7%であるということを報告⁽⁶⁾したものなどが挙げられる。このことから保健の授業においては、学習者のみならず授業者に関しても保健の授業に関する負の側面を解決することが求められていると言えよう。

そもそも授業には、授業時数や、学習者と授業者の関係などの外的条件と、授業の目標、内容、方法、評価による内的条件があると考えられる。保健の授業において、これら授業の内的条件に関する研究はなされている。しかし、いずれもどのような授業

が学習者の学力形成や、興味・関心に対してどのような影響を及ぼすかなどの授業が持つ学習者への影響に焦点を当てている研究がほとんどである。

そこで本研究では、授業者自身が持つ保健の授業に対する意識・イメージがどのように授業の内的条件に影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的に、小学校・中学校・高等学校における保健の授業を担当する者の意識・イメージ、授業の内的条件の実情を把握し、意識・イメージと授業の内的条件との関わりを検討した。

2. 研究方法

2015 年 7 月～8 月にかけて調査協力の依頼をし、承諾を得ることができた学校の教員を対象に無記名自記式の質問紙調査を実施した。配布および回収方法は、学校長を通して実施したケースと、教育委員会を通して実施したケースがある。いずれも回収期限を設けずに実施した。

調査対象は、愛知県内の小学校、中学校および高等学校で保健の授業を担当する教諭とした。調査協力者は小学校 12 校に属する 144 人（男性 52 人、女性 87 人、不明 5 人）、中学校 4 校に属する 23 人（男性 13 人、女性 10 人）、高等学校 3 校に属する 14 人（男性 10 人、女性 3 人、不明 1 人）であった。

調査内容は、基本的属性 5 項目、保健学習に対する意識 7 項目、学習者に対するイメージ 5 項目、自信の授業に対するイメージ 10 項目、授業の内的条件に関して 58 項目の合計 85 項目であり、統計ソフト IBM SPSS Statistics Version 21.0 for Windows を用いて統計処理を行った。有意水準は危険水準 5%未満とした。

3. 結果

授業者の意識について、保健の授業に対する意識では小学校教諭は「他の教諭に代わってもらいたい (31.7%)」、「養護教諭の方が適性が高い (72.3%)」、「実施することが恥かしい単元がある (31.0%)」と

回答する割合が有意に高かった。一方で中学校・高等学校教諭は「本や論文などで勉強をしている(57.1%)」と回答する割合が有意に高かった。「勉強会や講演会に出ている」は小学校教諭 12.2%、中学校・高等学校教諭 8.6%であり、有意差は認められなかった。

授業の内的条件について、授業の目標を設定する者は小学校教諭で 66.2%、中学校・高等学校教諭で 80.0%であった。中学校・高等学校教諭は「授業の目標を設定する際に学習者の関心事を参考にする(44.0%)」と回答する割合が有意に高かった。

授業の方法について、小学校教諭は「養護教諭などの専門性を有した者が参加する(43.7%)」授業方法を実施すると回答する割合が有意に高かった。一方で中学校・高等学校教諭は「自作プリント(84.8%)」を使用する割合が有意に高かった。

学習状況の評価について、小学校教諭は「授業内での行動(80.2%)」、「授業時間以外の日頃の様子(54.0%)」、「学習者の保護者や友人などから聞いたこと(17.9%)」と回答する割合が有意に高かった。一方で中学校・高等学校教諭は「レポート 75.8%」と回答する割合が有意に高かった。

4. 考察

小学校教諭は保健の授業に対するイメージで「他の教諭に代わってもらいたい」、「養護教諭の方が適性が高い」、「実施することが恥ずかしい単元がある」と回答する割合が有意に高かったが、これは小学校教諭が必ずしも体育科「保健領域」を専門としていないことが原因と考えられる。このことは、自身の授業に対する意識で中学・高等学校教諭に肯定的な回答が多く、さらに「本や論文で勉強する」と回答される割合が有意に高いことから考えても、中学・高等学校が教科担任制であることや、小学校教諭が必ずしも体育科「保健領域」を専門としていないという学校教育の構造的な要因が授業者が持つ保健学習に対する意識・イメージや授業への取り組みに影響を及ぼしていることが考えられる。構造的な問題が保健の授業に対する意識への影響を及ぼすのであれば、小学校体育科「保健領域」における教科担任制の検討の必要性が考えられる。

一方で学習者に対する意識をみると、中学・高等学校教諭が「授業は眠たい」と学習者が思っていると回答する割合が有意に高かった。これは、学習者が「受験に関係がないと思っている」と回答する割合も有意に高いことから、中学生・高校生の多くが受験を控えており、保健科が受験科目でない日本においてはそれが軽視されることが学習者に授業態度や授業者が持つ学習者への認識に影響を与えている要因として考えられる。中学・高等学校教諭は授業の目標を立てる際に「学習者の関心事」を参考にする割合が有意に高いが、このことから考えると、保健学習より受験科目の勉強に価値を見出す学習者がいるということを前提に授業をしているため、学習

者の関心事から授業目標を設定することが保健学習に対する取り組みをよりよくするような取り組みがなされているものだと考えられる。しかし、中学生・高校生が受験を控えており、受験において保健学習で習うことのほとんどが出題されないという現状は学校教育の構造的な問題である。その構造的な問題によって授業者の保健学習に対する意識・イメージが左右されている現状は望ましいことではない。受験関係がないことという事実を踏まえ、教科目標を達成していくことが保健学習に求められているといえよう。

中学校・高等学校が教科担任制であり、中学・高等学校教諭が「本や論文などで勉強している」と回答する割合が有意に高いことから考えると、中学・高等学校教諭の方が保健の授業に対する専門性が高いように考えられる。このことを踏まえて授業で使用する教具において中学・高等学校教諭は「自作プリント」を使用する割合が有意に高いということについて考えると、教科書や資料集、学習指導要領に記載されている内容を学習者の関心事になどの授業目標と照らし合わせながら再構成し、授業者自らプリントを作成するにはある程度その教科に対する知識などの専門性が必要となるものだと考えられる。しかし、「養護教諭の方が適性が高い」と回答される割合や、実際の授業においても「養護教諭などの専門性を有した者が参加する授業」を実施すると回答される割合が中学・高等学校教諭において有意に低いことから、中学校・高等学校における保健学習では、担当する教諭のみの力量によって保健学習が運営されることが多いことが示唆された。

参考文献

- (1) 野津有司ら：「全国調査による保健学習の実態と課題-児童生徒の学習状況と保護者の期待について-」、学校保健研究、Vol. 49、pp. 280-295 (2007)
- (2) B.S.Bloom, et al: "Taxonomy of Educational Objectives. Handbook 1", David McKay, New York (1956)
- (3) Krathwohl.D.R., et al: "Taxonomy of Educational Objectives. Handbook 2", McKay, New York (1964)
- (4) A.Harrow: "A Taxonomy of the Psychomotor Domain", Davit McKay, New York (1972)
- (5) 角田仁美ら：「保健学習に関わる教員研修の参加に関する検討-都内の高等学校保健体育科教員を対象にして-」、学校保健研究、Vol. 52、pp. 151-158、(2010)
- (6) 小林稔ら：「小学校体育「保健領域」の実施状況および教員の意識とその変化について(第2報):新学習指導要領に対する準備状況と教員の意識」、学校保健研究、Vol. 45、pp. 257-269、(2003)